岩手大学文化論叢　第12輯（2024.3）11 ～ 29

遠野南部家『勤王五世物語』の成立
－学校から見える地域社会－

今　野　日出晴*

はじめに

学校資料を歴史の授業で活用する[(1)]ということでは、社会の出来事が、学校ではどのように現れてくるのか、『学校日誌』などで、それを確かめるというような方法がとられる。最近では、コロナウィルス感染症のパンデミック（世界的流行）を受けて、歴史のなかの伝染病や公衆衛生について関心が高まり、『学校日誌』に記されたスペイン風邪の記述が、各地の博物館などで展示されるようになった。大平聡は、宮城県内の『学校日誌』から、1918（大正7）年からのスペイン風邪の記述を分析し、その推移、学校の対応（臨時休校など）、「感冒予防用口覆」（マスク）の着用などの具体相を明らかにした[(2)]。こうした事例を実際の授業で活用することができるであろうし、これまでも、自校の『学校日誌』から、社会的歴史的に重要な出来事に関連する記述を見出し、授業に活用するということは、有効な方法として実践されてきた[(3)]。

しかし、ここでは、そうした方法ではなく、学校資料を一つの窓にしながら、地域社会の文化や思潮を明らかにしてみたい。それは、学校と教員とが地域においてどのような役割を果たしてきたのか、学校資料を活用することによって、教育という営み、そのものを問い直すことにつながっている。本稿では、遠野市と遠野小学校とを対象にしながら過去に遡って、『遠野物語』の遠野という「民話の里」のイメージとは異なる、もう一つの教育文化の思潮を具体的に明らかにしてみたい。

その際に、窓となった学校資料は、遠野国民学校（三浦榮校長）の『学校日誌』、1943（昭和18）年5月の記事「八戸市会議員　山口氏来校　勤王五世資料研究ノタメ」（18日）「八戸市会議員山口氏来校」（19日）である。二日にかけて、来校した八戸市会議員の「山口氏」とは誰なのか、そして、「勤王五世資料研究」とは何なのか、それは、何のためなのか、そうしたことを検討したい。そのことによって、『遠野物語』とは別のもう一つの『勤王五世物語』に象徴される、当時の教育文化の様相が明らかになると考える。

まず、明治以来の遠野の教育文化の状況はどのようなものであったのか、その特徴を検討する。自由民権運動と教育という論点にも列なるものだが、その際には、山奈宗真、堀内政吾らの動向を確認し、次に、そうした状況の基層にある心性を提示したい。さらに、次世代としての伊能嘉矩、鈴木吉十郎・鈴木重男らの足跡を辿りながら、『勤王五世物語』がどのような経緯で成立し、どのような役割を果たしたのか、明らかにしたい。そのことによって、地域のなかの学校や教員、教育という営みの持つ意味を問い直してみたい。

＊　岩手大学教育学部社会科教育学研究室

1．明治期の遠野ー自由民権運動と学校ー

近代学校は、それまで地域に定着していた教育のあり方を大きく変貌させていく。その過程は、教育制度の転換として、伝統的な藩校・郷校、寺子屋から、革新的な近代学校へと、入れ替わっていくようにみえる。しかし、培われてきた伝統的な教育文化は、容易に消滅せず、沈殿し、層をなして積み重なり、その地域の基層的な文化を形成する。それは、新たな意味づけによって補強され、意外に長く、その地域を覆っていく。

遠野の伝統的な教育文化の中心は、郷校信成堂であった。信成堂は、盛岡藩の筆頭家老であった南部弥六郎済賢（ただかつ）のもと、1853（嘉永6）年に、江田泉（霞村）・田口圭一郎（梅雪）・工藤謹之助（春亭）の建言によって設立された。遠野南部家の「士籍に在る者の子弟」を対象に、文学・武芸の2科からなっていた。文学では、四書五経の素読や講義、詩作、算法などが教授され、設立の際の工藤謹之助の手による信成堂の記には、「南朝勤王之裔、而忠誠節義之風、累世不没、以至今日、此乃先世遺俗流風之美者也」とあった。こうした記述をうけて、伊能嘉矩は「領主遠野南部氏が、対朝廷関係の史蹟に鑑み名誉ある祖先の遺風を顕彰祖述せんとするに在りしが故に、自ら尊皇愛国の主義を以て校風と為す」[(4)]と意味づけた。後述するが、幕末において、遠野南部氏を「南朝勤王」として位置づけて、そこに家臣としての自己意識を見出していたことは確認しておきたい。

「学制」の頒布によって、1873（明治6）年5月、「第二中学区内閉伊郡横田村第一番小学校」（横田小学校）が瑞応院に開校する。開校時の教師は、信成堂の教授であった江田泉、授読であった田口小作、奥寺勇太、同じく算法科師範役であった松橋安蔵の4名であり、信成堂の教授陣がそのまま担当していた。開校時は百人ばかりであったが5月末には200人に達して、手狭になり、1875（明治8）年には、横田小から東横田小学校が分離され、一つの村に2校を数えた[(5)]。ちょうど、この頃に、盛岡師範学校校長加納久宣が閉伊郡を巡視した日誌が残されている。それによれば、1878（明治11）年9月21日に、「附牛（馬カ）牛・松崎・糠前・飯豊・横田（東・西）之六校ヲ巡視シテ、飯豊ニ泊ス」とあり、その案内をしたのは、「取締米内直豊・伊能友寿」[(6)]らであった。そこでは「横田校ハ是川鉄造（訓導補）外数名ノ教員備ハリテ生徒百四十名許、上等第六級ニ至ルモノアリ。従来漢学ノ行ハルル処ナリシヲ以テ、読書ニ長ジテ算術等ニ短ナリ。東横田校ハ訓導補菅沼仙太郎外三名ノ教員アリ。出席生員六十四名二級ヲ以テ第一級トス。両校トモ尚未ダ授業法一定ナラズ」という状況であった。まさに、信成堂以来の漢学の伝統のなかにあり、未だ近代的な教授法が定着していないことがわかる。

1879（明治12）年には、横田小の財務を扱う学費委員の山奈宗真によって、一村に2校というのは、「一村経済の上より見るも、教育の統一より見るも、決して得策ではないとして」[(7)]、両校を合併し校舎を新築することが建議され、翌1880（明治13）年には新たな横田小学校で授業が始まることとなった。ところが、9月、突如、横田村の初代学務委員江田泉[(8)]から、横田小学校の閉校届が出される。江田によれば、「當校教員六名」が「病気申立」を行ったための閉校処置であるとされたが、山奈は、これをうけて、新たに「教員ヲ以テ當校ニ雇イ入レ」「此機ヲ以テ當校一大改革ヲ執行シ教育ノ隆盛」[(9)]をはかろうとしたのである。それは、「盛岡に至り有力なる教員を聘（へい）し来り」、「大いに校務を改良せし」[(10)]ものと評された。この「一大改革」については、軽部勝一郎が、自由民権運動と近代学校の問題として詳細に検討している[(11)]。軽部は、まず、このときの閉校処置は、病気が原因ではなく、岩手県が学業試験を実

施し、すべての教員に資格取得を義務づけたことにあり、それに地域の教員らが対応できずに閉校となったとした。そして、盛岡の民権結社求我社の社員堀内政吾[12]が首席訓導に招かれ、横田小学校の教員は「民権派」で占められることになり、横田村の学務委員についても江田が辞任し、山奈をはじめとして、新たに商人層や町村会議員などが選任され[13]、「学事指導層交代」が進んだことを提示した。さらに、堀内の着任を契機に、横田小学校の教員を軸に政談演説会などが盛んに開かれたことを『日進新聞』の記事などから確認して、遠野における自由民権運動の高まりを意味づけた。「伝統的な地域観に固執しない新たな課題意識をもった民権結社信成社や、若者たちによる学術結社養成社が設立され」、堀内らの民権派教員によって、「近代的教育知識」による教育実践がおこなわれていくのであり、こうした取り組みが「近代学校を受け入れる基盤を作り、近代学校としての内実作りを促すことになった」としたのである。

確かに、近代的な教育知識や教育技術、さらには、近代学校制度の定着という側面において、民権運動の担い手であった教員集団が、大きな役割を果たしたことは疑いない。遠野の民権運動は、山奈の主唱によって、菅沼仙太郎（東横田小教員）を中心に開進社を結成して運動を進めたとされる[14]。さらに、1880（明治13）年4月には、集会条例が制定され、軍人や警官に加えて教員の政治参加が制限されるが、こうした状況に相前後して、求我社では、これまでの「教育運動」を中心にしたグループが『盛岡新誌』の休刊後に『東北教育新聞』を発刊し、活動の舞台をうつしていった。この『東北教育新聞』の発行願を県庁に提出したのが、当時、盛岡市中野小の教員であった堀内政固[15]であった。そして、この『東北教育新聞』の売捌所としてあげられていたのは「遠野駅裏　開進社」であった。さらに、第3号には、「此頃西閉伊遠野駅山奈宗真氏より県庁へ県内教育大会議を開くべき旨建言せし」と紹介され、第4号では、それをうけて山奈の教育会議開設の建議を「美談」として紹介し、各校の教育者が集まり、議論することで知識を交換することができるとまとめられ、「自由主義」の問題として議論は引き取られていった[16]。こうしてみれば、山奈と堀内という人的なつながりのなかで、横田小学校の「一大改革」が実施されたのであり、堀内を招くことによって、近代的な教育技術が広まり、遠野の民権運動が盛んになったことは確かであろう。特に、「西閉伊郡横田学校訓導堀内政固氏ハ昨年十月赴任以来、人力一方ならずして能く該地固有の学風を一変し夜な夜な近村の教員を集会して物理学の講義を初め居られるので日倍盛大に赴くの景況あり。旧冬大試験の折りも昇級生徒頗る多かりしと」[17]と報じられるように、それは、遠野の「固有の学風」を一変させるような衝撃をともなっていた。

しかし、伝統的な江田泉ら（守旧派）と革新的な山奈宗真・堀内政固ら（民権派）の相克から、後者による前者の排除と克服によって、民権的な思潮が定着していったという図式で理解することは正しくない。むしろ、江田泉らと山奈宗真は、多くの点で、旧武士としての心性を共有していた。結論的にいえば、むしろ、ここで問題にすべきなのは、旧武士身分の人びとが有していた心性が、明治期になっても、近代的な知識を吸収し、接合させながらも、基層部分では温存されていくのはなぜか、ということなのだ。その点からいえば、山奈の政治思想には、民権運動家としての視点が見られない[18]のは当然であり、若き日に民権運動に奔走したとされる伊能嘉矩であっても同様で、「民権と国権を同一視する近代の日本の知識人」[19]の姿がそこにはあった。そこで、次には、江田や山奈など、遠野の旧家士たちを捉えていた問題意識とは何か、検討してみたい[20]。

2. 士族になれなかった人びとの近代－士族回復運動－

戊辰戦争は、遠野南部氏を複雑な立場においた。遠野南部氏の弥六郎済賢は、盛岡藩のなかでも他の家老らとは別格の位置にあった。遠野は、10万石の盛岡藩の統治下にあったが、実質的には、1.2万石の遠野南部領は最大の家臣であり、いわば委任統治のような状態で、「領内ノ制度、士民ノ格式総テ一藩ノ体裁ヲ備エ」（「士族復籍請願書」[21]）ていると認識していた。領主の弥六郎済賢が、勤王の立場を明確にしたが、藩論は幕府支持となり、奥羽越列藩同盟に参加することになる。盛岡藩は、奥羽越列藩同盟を離脱した秋田藩と「秋田戦争」を戦うことになるが、弥六郎済賢は、この評定に承服せず、閉門となってしまう。結局、戊辰戦争は、官軍の勝利となり、盛岡藩は賊軍として白石に転封される。遠野南部氏も亘理郡に移ることが決められた。しかし、遠野の武士たちにとっては、「朝敵になることを極力反対しながら、敗戦と同時に朝敵にされ」たということであった。皮肉なことに、盛岡藩の武士たちは、廃藩置県のなかで、献金などの交渉の末、盛岡復帰が許され、家臣たちもその多くは士族籍を得ることができた（士族籍を得ることは、武士の面目を保つだけでなく、奉還録公債を獲得することでもあった）。しかし、遠野南部の武士たちは、自分たちは朝敵でないと考え、盛岡藩士たちのような対処をしなかった。そのため、士籍から除かれ、浪人とされたのである[22]。

武士であったにも関わらず、明治維新の果てに、士族にもなれず、当然、受けられたはずの奉還録公債も受けられないということを意味していた。士族がどのように近代を迎えたのか、「士族の没落」という枠組みで語られることもあるが、士族になれなかった人びとにとって、その「没落」は、より過酷なものであった。武士身分は、過去のものとなり、過ぎ去っていくはずだが、遠野では、士族に列せられなかったがゆえに、過ぎ去らない過去として立ち現れ、より強く人びとを拘束していく。

このルサンチマンとでもいうべき心性が、江田泉や山奈宗真たち、遠野の旧家士が共有していたものだった。それゆえに、士族としての名誉回復（士族に「復籍」すること）が悲願とならざるを得なかったのであり、「南朝勤王」こそがその核心にあり、人びとを結びつける紐帯となっていく。朝敵ではなく、勤王であることが、自分たちの存在証明であった。

1861（文久元）年、江田泉は、清川八郎ら、勤王の志士と結び、決起の呼びかけに応えようとしていた[23]。そして、1883（明治16）年、館森袖海が江田のもとを訪ねた際に、江田は、「吾は南朝忠臣の後裔なり」と語り、「嘗て勤王の挙を謀りしこと」を説いた[24]。これは、江田が亡くなる前年の出来事であり、江田の生涯にわたって貫かれていた「南朝勤王」の意識をうかがうことができる。、

山奈宗真は、一般には、「殖産興業の先覚者」として位置づけられ、「農業の近代化」「農業試験所」の設立、牧場経営、牧牛や馬産の奨励、農機具、桑園の奨励、製糸工場の設立などが記載される（開進社、自由民権運動、そして、教育としては信成堂書籍館、遠野中学なども）[25]。しかし、そもそも、「殖産興業」を進めた理由は何だったのだろうか。それを伺う出来事がある。1878（明治11）年県令の島惟精が巡回の際に山奈の立丸牧場に立ち寄ったところ、山奈が不在であったため、後日、山奈は、県庁で島に面会を求める。「遠野の地未だ著しき物産」がないだけでなく「維新後南部の旧臣四百余名、皆農に帰し産業に就かんとするも、目下糊口に逼（せま）れるもの多く、経営の緒に就く能はず」という窮状を訴える。それゆえに、自ら「聊（いささ）か率先事業を開き模範を示さん」として、「洋牛馬及び綿羊」の貸し付けを求めた[26]。山奈は、遠野南部家の旧臣たちの授産のために牧場経営などの「殖産興業」を始めたのであった。

そして、何よりも、鍋倉神社の創立に尽力したことが重要であろう。1881（明治14）年「横田村平民　出願総代人　山奈宗真　外二百拾名」として、神社設立の「願書」[27]を県令島惟精に提出する。それによれば、「旧主人南部弥六郎先世師行以下四世、力ヲ王室ニ竭シ義ニ殉シ節ニ死ニ候得共、其事蹟煙滅シテ」という状況であった。ところが、「明治九年　聖駕東巡ニ付、家伝ノ文書刀鎧ヲ以テ　天覧ニ供シ奉リ」、「保存料金弐拾五円賜」った。明治天皇の東北巡幸の際に、家伝の「文書刀鎧」を天覧に供し、保存料として25円下賜されたということがわかる。ここで、「勤王五世」と意味づけられる「事績」が「煙滅」していたということを確認しておきたい。続けて、朝廷維新の初めより、楠氏や新田氏の如く、「勤王尽忠ノ士」を表彰してきたことは「美挙」であり、同様に「師行以下四名ノ霊ヲ祭リ万世保存之道ヲ謀リ、永世祭祀」のために、鍋倉神社の創立を出願したのというのである。

さらに、つけ加えれば、横田小創立時の教員であった奥寺勇太も、山奈とともに、学務委員となり、その後、町会議員となったが、家塾を開きながら、「主家祖先の勤王事歴を調査」し、「世に宣揚せんことを志」した[28]のであった。そして、奥寺の調査した資料は、その後、伊藤榮一『波木井南部家　勤王八世傳』（波木井南部八世勤王家後援会、1922）に使用され、「あとがき」に「奥寺勇太先生が多年蒐集せられたる遺稿によりたるもの」と記載されている[29]。

また、1878（明治16）年に、斉藤順治著・田口小作校訂として『南部五世傳』が刊行されるが、序文・後書きによれば、仙台藩の斉藤順治の「稿本」を、没後に田口小作が校訂して出版したのであり、それは、「積年之志」であったと記される[30]。さらに、田口は、鍋倉神社の創立の際、1880（明治13）年の「健社趣意書」に、山奈と連名で署名していた[31]。郷社である鍋倉神社の社掌（郷社の神職）をも勤めていた。横田小学校に勤務していた田口は、1874（明治7）年に宮城師範学校に入学し、翌年卒業したあと、山梨県四等訓導として派遣され、以後、岩手県師範学校訓導を経て、岩手県に戻り、岩手中学校、盛岡高等女学校教諭と教育界で活躍する[32]。ここで、注目したいのは、宮城師範学校を卒業したときに、田口を横田小に在勤させて、横田小内に伝習所を開設するという動きがあったことである。遠野地方22か村の戸長・副戸長・学区取締ら114人からの請願を受けて、一旦は、許可されたが、文部省による山梨県への派遣が決定していたため、実施に至らなかった[33]。岩手県では、小学校教員に多くの士族が任用され、盛岡に在住していた旧藩士たちは、県内の小学校に派遣されていったのである。そうした状況からすれば、士族になれなかった遠野南部家の旧臣たちにとって、その「文化的な素養」を活かす道として、小学校教員は武士に替わる「地位」と「名誉」を有するもの[34]であった。それゆえに、自前で教員伝習所をつくることが必要だったのである。また、1881（明治14）年、西閉伊郡33ケ村連合議員の山奈宗真が、「公立西閉伊郡内中学校設立建議」を提出していることも、興味深い。前年、盛岡に、岩手県で最初の公立岩手中学校が設立されたのを受けて、「公立中学校ヲ設置シ、学事ヲ隆盛セント」と、「中学校設立之見込書」で、設置のための費用、維持するための方法などを試算して提出したのである[35]。これらには、旧盛岡藩への対抗意識も垣間見えるが、中学校設立は、このあとも地域の要求となって、1901（明治34）年の遠野中学校（県内二校目）として開校された。

こうして見れば、まず、第一に指摘できるのは、士族になれなかった遠野南部家の旧臣たちの、（旧盛岡藩の士族に対抗するような）切実な教育要求である。旧遠野領では、圧倒的な「文化エリート」であった家士たちが、その「文化的な素養」を活かして栄達をはかる道として、近代的な学校は重要な意味をもっていた。その意味では、遠野では、むしろ、伝統的な、武士として

のエートスを、それも「士族」になれなかったという鬱屈したエートスを推進力にして、近代学校が形成され、定着していったと言って良いだろう[36]。

さらに、第二には、その鬱屈した心情は晴らさなければならないのであり、それは、「旧臣復族」（士族籍回復）として実現される必要があった。そのためには、旧主遠野南部家が勤王であることを歴史のなかから導き出し（召喚し）、顕彰されなければならなかった。明治政府は、「維新ノ大業」への功労者、南北朝期の南朝方の公卿や武将らに、贈位することで顕彰していく。そうしたなかで、1896（明治29）年に南部師行に正五位が贈られ[37]、翌年には、遠野南部家の南部行義が男爵に授爵される。それに伴い「維新ノ初年遠野旧臣諸氏皆民籍ニ編入セラレシガ、是ニ至リ相謀リ士族ニ復センコトヲ官ニ請フ。官之ヲ允（ゆる）シ、明治三十年十二月ヨリ、今明治三十二年十二月ニ至ルマデ士籍ニ復シタルモノ三百二拾人、其未ダイタラザルモノ百余人アリ」[38]となったのである。その意味では、宿願は果たされたということではあるが、同時に、この時期（1895年）鍋倉神社の社格が郷社に陞格することもあって、人物顕彰と関連づけられて、鍋倉神社周辺、旧鍋倉城址は史蹟として特別の意味をもってくる。1910（明治43）年には、二の丸跡に、「遠野町在郷軍人会の主唱」によって、「日清・日露両戦役に於ける當町出身戦病死者の為め、忠魂碑を神社の東隣なる丘上に」建てられた。それは、鉄柱製の高塔（全長三丈五尺）で、柱頭には鉄球を付して「死者の霊魂」を形象し、球上には「鉄鷹飛翔の形」を装置し、「軍人の武勇」を表していた[39]。その意味では、旧鍋倉城址は、鍋倉神社、忠魂碑[40]と、顕彰のための装置が整備され、士族籍に限定されるような心性から脱却し、地域全体の精神的な支柱としての意味が強まり、新たな史蹟空間となったのである[41]。

3. 伊能嘉矩と郷土研究会

伊能嘉矩に関する研究は、伝記的な側面、台湾研究（人類学的な調査活動、植民地支配との関連）などに分けられる[42]。台湾研究に関わっては、日本だけでなく、台湾でも探究されているが、その一方、伝記的な側面では、特に、伊能の思想形成、上京以前の青年期については、意外に言及されることは少ない。本稿で提示したことからすれば、まず、国学者伊能友寿を祖父に、漢学者江田泉を外祖父にもつ、というだけで、その学問的基盤が郷校信成堂にあることは容易に理解できる。事実、小学校入学以前に、「修身学ノ大意」を学んでいたが、横田小学校を優秀な成績で卒業すると、1880（明治13）年に敬身塾（江田泉の漢学塾）で「修身歴史文章学」を修め、６月には、祖父の友寿から「国学ノ大意」を学び、夜は信成堂の授読をしていた小笠原民助のもとで意開かれていた歴史の輪講会に通っていた[43]。そして、この頃、信成社や養成社によって盛んに演説会が開かれ、自由民権運動の思潮が盛んになったとされる。先の軽部勝一郎は、『日進新聞』などから、1981，82年の演説会の状況を丁寧に調査・提示している。それを見ると、10代の伊能嘉矩も登壇し、「女学校の設立」を要求する演説などをしていることがわかる。軽部は、信成社について、「開設趣意書」の「交を世界万国に求めざるはなし」、「此皆自治の精神を発達し、自由の権利を伸長し、以て国民の義務を尽くし、万国と其光輝を競はん」、「其見聞を拡充し其知識を増益する」などのところから、「伝統的な地域観に固執することのない、民権結社としての新たな課題意識」を見て取る[44]。

しかし、軽部が引用を省略したところに、信成社の設立の意図が示されている[45]。そこでは、信成堂の教育の意義が語られ、それが明治維新で廃止されて10年経ったこと、そのため「志気才学」ある者が老いて、亡くなり、「活発奮励の風」が衰えてしまったこと、それを憂い

て信成社社員の山奈宗真が開進舎、信成書籍館[46]を設立して見聞を拡げ智識を得ようとしたが、良い結果は得られなかったという認識が示される。そして、軽部の引用した部分が続き、1881（明治14）年に相談して「信成社」を設立したが、それは「旧南部氏の遺志を継ぎ、活発奮励」の勢力を挽回し、「諮詢講議演説討論」をして「文明の域」に進もうというのである。これから理解されるように、民権結社信成社は、その名の通り、信成堂を受け継いだ学術・学習結社とでもいうべきもので、教育機関としての側面は軽視すべきではない。それゆえに、伊能嘉矩が信成社を「信成堂の精神を祖述せしもの」としていることも重要であろう。

また、養成社についてみれば、1882（明治15）年に、伊能が、養成会員総代として、更正届を出している。その際の社則をみれば、「本社ハ、人材ヲ養成スル」ことを目的とし、会員の志望によって教師を招き、「講議会」を開き、学科は「修身学、歴史学、文章学、理学、化学」の5学科であった。そして、「演説討論会」「算術会」「法律会」があった。別紙の「照会」には、養成社の概要が記されたあとに、「養成社ハ純然タル私立学校ト認ムベキ者ニ付」、「其設置方」を伺い出るべきで、それを届人に知らせるようにとしていた[47]。「私立学校」として扱おうとする構えが確認できる[48]。士族になれなかった遠野南部家の旧臣たち、そして、伊能らの世代においても、切実な教育要求があったことがわかる。

伊能は、1884（明治17）年に「横田小学校の助手となる」とされるが、正しくは1884～86年の3年間横田小学校の助手を勤めていた[49]。堀内政固は、すでに、1883（明治16）年には、遠野を離れていたので、直接重なることはないが、しかし、小笠原民助は、1881（明治14）年には、横田小学校で訓導として勤務していた。その意味では、伊能嘉矩と堀内政固をつなぐ媒介ともなり得たであろう。いずれにしても、伊能が実際に小学校の授業を担当していたことは興味深い。そこでの成果が伊能の「学校近傍地形教授法」[50]であった。これは、題名の通り、横田小学校の近傍地形の教授法を示したもので、丘陵、山、平地、川、池沼、瀑のそれぞれについて、開明、定義、名称、関係位置の項目ごとに整理する方法をとっている。「順序ヲ立テヽ、漸次児童ノ心智ヲ恵迪」しようとするものであった。これらをみれば、横田小での勤務を通じて、近代的な教育知識・教授方法を獲得していることがわかる（この論考を掲載した『岩手学事彙報』が、掘内政固の兄が経営する九皐堂から刊行されたことも偶然ではない、伊能は以後、『岩手学事彙報』に多くの論考を寄せる）。その点からすれば、信成堂以来の修身学・漢学・国学・文章学・歴史学を中核にすえながら（「南朝勤王」としての心性を維持しながら）、信成社や養成社での政談演説、学術演説、学科で学び、さらには、横田小学校での近代的教育知識・教授方法を接合させていたのである。その意味では、1883（明治16）年、養成社で社員として写真をとり、その裏書きに「大日本立憲愛国党員　伊能嘉矩」とあるのは、よく理解できる。「民権と国権を同一視」する姿勢は、この頃すでに形成されていた。こうしてみると、山奈も伊能も、「南朝勤王」を核にして、近代合理主義が矛盾なく接合していた。

伊能は、台湾での調査研究を終えて、1908（明治41）年遠野に戻ってくる。遠野に関していえば、1910（明治43）年、柳田国男の『遠野物語』（聚精堂）が出版される。刊行されたとはいえ、『遠野物語』は遠野の人びとにとって、馴染みのない物語であった。6月18日付けの佐々木喜善宛の柳田書簡には、「遠野人ニハ一冊もおくり不申」「部数僅二三百故□御心配ハ少しもなく候」[51]とある。『遠野物語』で描かれた世界は、人名も含めて、地元の人が読めば、どこの誰のことを書いたのか、すぐにわかるものであった。それゆえに、柳田は、「『遠野物語』に記した人名の及ぼす影響力を予感し、おびえはじめていた」のであり、「『遠野物語』は遠野の人に

は読まれたくないタブーの書物」[52]であった。1935（昭和10）年に「遠野物語拾遺」299話を加えて『遠野物語　増補版』（郷土研究社）が再版されたが、しかし、それは、「増補版の刊行が殆ど黙殺された事実に、いささか公憤の如きものを感じた」（桑原武夫）というほどであった。一般の読書人に知られるようになるのは、戦後をまたなければならなかった[53]。

柳田が伊能嘉矩をはじめて訪ねたのは、1909（明治42）年8月であるが、このときに、伊能の他にも、鈴木吉十郎や及川忠兵衛らも集まり、「南部家文書」を見ることができたというのは興味深い。その時に、「南部家文書」の公刊の話が出たという。翌月の柳田の書簡にも、「鈴木翁にも御慫慂下され、何とかして今のうちに御編纂御考証相成候はば、学界の幸これより大なるものなかるべく候」としている[54]。伊能嘉矩のもとで、郷土史を研究するグループが生まれていることが伺われ、柳田から「南部家文書」の編纂と考証が鈴木吉十郎（書簡中の鈴木翁）に勧められている。鈴木は、先の『遠野士族名簿』を編纂した人物で、まさに、士族籍回復運動の中心にいた。

この頃、内弟子のようにして、伊能家から遠野中学に通っていた（1907 ～ 1912）のが、板澤武雄で、板澤は次のように回顧している。「よく郷土関係の写本をしてをられた御様子が目に浮ぶ。御老人では及川忠平氏、鈴木吉十郎氏、お若い方では佐々木繁 後の喜善氏、忠平氏の令息（ママ）鈴木重男氏などは先生のところに出入りされたこの方面の常連であった」[55]とする。「大正10年（1921）ごろから伊能を中心に郷土研究会はできていて、佐々木喜善、鈴木重雄（男）らが会員で毎月例会を開いていた」[56]とされているが、板澤の回顧のように、実態としては、それ以前から小規模な集まりがあったと考えられる。

こうした人びとによって多くの成果が公にされる。伊能嘉矩は、『遠野史叢』第1篇（1921年）以下、全7篇や『上閉伊郡志』（1913年岩手県教育会上閉伊部会の依嘱によってまとめたもの）などを、鈴木吉十郎は、『遠野史談』（1902年、序文：田口小作、八戸宜民の遺稿を編んだもの）、『遠野小誌』（九皐堂、1910年、序文：伊能嘉矩）を、そして、鈴木重男は、土淵尋常小学校校長で、まず『土淵村郷土誌』（1914年、のち『復刻版　修正郷土誌』1998年）、『阿曽沼興廃記』（1920年、解題：伊能嘉矩）、『岩手県上閉伊郡　石器時代異物発見地名表』（遠野：内田書店、1922年、伊能嘉矩との共著）などである。

そして、鈴木重男は、1924（大正13）年、これまで父吉十郎と共に蒐集してきた郷土資料を展示して、遠野郷土資料館を公開した[57]。本稿の視点からすると、この年に、郷土研究会が正式に発足したところに注目したい。発起人は、伊能嘉矩・佐々木喜善・鈴木重男・山本茗次郎・伊藤栄一らであった。会則によれば「遠野郷土研究会」の名称で、「遠野郷土館内に置く」ものであった。その目的は「本郡ヲ中心トシタル郷土史並土俗ノ調査研究」であった。そのために毎月1回の例会が組まれるが、必ずしも盛会というものではなかった[58]。

この時期は、明らかに、遠野の郷土史に関する資料収集が進み、その成果が発表されていった。会則にあるように、それは、郷土史と土俗の調査研究という二つの柱に基づいていた。そして、いずれも、伊能嘉矩を中心にして進められた。土俗の研究というのは、いわゆる民俗学に関わるもので、佐々木喜善がその柱を代表していた。そして、郷土史を代表していたのは、鈴木重男[59]で、この時期の「南朝勤王」の研究状況は、鈴木重男の回顧によって知ることができる。これまで紹介されたことがないものなので、長文であるが、煩いを厭わず、提示したい。

－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－

回顧すれば、余のこの史実を調査しやうと決心したのは大正11年正月であった。余の父は

早くからこの調査に着手したが、當時男爵家では古文書の閲覧を許さず、僅かに帝国大学に貸出す際に取扱ったり、或いは　大正天皇の東宮にましまして盛岡に成らせられし時、陳列して御覧に供へ奉れる際1，2点の読法につき御下問に奉答したに過ぎなかったので、僅かに古文書目録を調整したので世を終へた。父の病中幾回となく勤王史実の未完、終生の恨言だと聞いたので、遺稿を整理したら果たして不完全であった。勤王史実の研究は、故伊能先生も着手せられて居たが、その遺稿も亦未完で資料の蒐集程度であった。この状況に深く顧み爾来調査に着手し、側ら学習院教授板澤氏の援助を得て考証を進め大綱の脱稿を告げたのは昭和6年8月である[(60)]。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「勤王史実」に関しての研究は、史料的な制約のなかで、この時期はなかなか進展しなかったことがわかる。ここで注意したいのは、佐々木喜善の立場と視点である。佐々木は、柳田国男への書簡のなかで、この研究会について言及している。それによれば、伊能嘉矩の博識ぶりに驚きながら「時々肯きかねる節々」があるとし「折々の御講演などにても郷土研究に忠君愛国でなくては不可などと仰有れるので　いつも民力カンえう的なので拝聴してゐて面白いのですが、学問としては如何なもので一寸苦しい感じがする」[(61)]としている。さらに、佐々木は、教育会での「私の話が忠君愛国でなく亦且つ歴史ありませぬ所から、どうも請けが宜しくなく、或種の敬遠をされて居る事を残念に思ひます。会長なる郡の方からの請けが思はしくなく、専ら伊能先生の縄張りで御座います」としたあとに、「伊能先生の御弟子達が郷土歴史家ばかりで困ります」[(62)]と述べている。伊能嘉矩が、「愛国心とは蓋し愛郷心の延長のみ」と『遠野史叢』(1921) に題して、鈴木重男が「愛国ノ基礎概念ガ愛郷ノ概念ノ強弱ニ因シ、愛郷ノ概念ガ郷土知識ノ深浅ニ左右セラル」(『土淵村郷土誌』序文、1911) とする時、愛郷が愛国に従属されて、愛国のための愛郷へ傾斜し、史実は後景に退いていく。佐々木は、そうした時代状況への違和感を表明し、教育の世界でこそ、忠君愛国の物語が求められていることを感じとっていた[(63)]。

おわりにー国定教科書へー

1920 ～ 1930年代になると、知識偏重や画一主義の打破のために、「教育の実際化、地方化」が唱えられ、労作教育・公民教育・生活綴方教育・郷土教育が進められた。そのなかで、郷土教育は、文部省、地方行政、アカデミズム、教育実践と、さまざまな領域での支持をうけて全国的に展開された[(64)]。文部省の方針をよく表しているとされるのは、文部官僚（普通学務局長）であった、篠原英太郎の議論であろう。そこで、篠原は、教育の地方化、実際化の具体的方策として、また、思想問題を考慮するうえで、「最も重要なる地方教育の方法は育まれた郷土の自然と生活の特質を認識し、それによって郷土愛から国家愛への思想を培ふ事でなければならない。ここに郷土教育の重要性がある」[(65)]とした。まさに、郷土愛と国家愛とを直接に結びつけるものであった。それゆえに、1930年代以降の郷土教育運動が「郷土を教育の目標として、郷土に関する知識観念を付与し、郷土愛の覚醒や祖国愛を涵養することを主たる目的」[(66)]とされるのである。

地方行政においても盛んに実践され、岩手県の状況を『岩手日報』『新岩手日報』から関係記事をまとめてみると、1929 (昭和4) 年6月17日に、男教員協議会で、郷土教育の実際についての講演がおこなわれ (6／18夕刊)、1931 (昭和6) 年7月16日付けで、郷土教育並びに道徳教育振興研究に関しての通牒が出された (7/17朝刊)。これは、郷土に即した教授細目の編

成や実施計画の報告を求めるもので、以後、郷土教育指定小学校を定めて（8／12朝刊）、郷土教育の実際を学務委員が視察する（10／4夕刊、10／11夕刊）など、その普及がはかられていった。1932（昭和7）年になると、9月17日から3日間、県下で初めての郷土教育大会及び郷土教育展、さらには郷土教育協議会が両師範附属で実施され、特に、教育展は人気を集めた（9/16朝刊、9／17夕刊）[67]。その他にも各地域で郷土教育講習会が開かれ、全県下で実践が進められた。

加えて、1935年には、文部省主催：郷土教育講習会が岩手県師範学校（7月25日～28日）で開催された。この年は、他に、秋田県立大曲農業学校、茨城県師範学校、三重県師範学校、高知県師範学校で実施され、すべての講習会に文部省嘱託小田内通敏が「地域研究と郷土教育」として講演していた[68]。そして、岩手の講習会に岩手県から講師として参加したのが鈴木重男であった。鈴木は、「岩手県農村の実情」を題して報告し、「細密なる岩手山村の研究を帰納して郷土の行方を示す」とされた。

鈴木重男がこうした郷土教育の中心にいたことは間違いない。鈴木は、1927（昭和2）年に土淵小学校の校長を辞任し、岩手県教育会主事に就任した。以後、教育会に購買部、出版部、映画教育部を新設しただけでなく、岩手県教育会編『郷土読本』（1929年）、『岩手青年教科書　昭和11年版』（1936年）の編纂[69]に力を尽くしたことは重要であろう。そして、『郷土読本』上巻には、「22　遠野南部氏の勤王」（118～124頁）が掲載されている。そこでは、「某先生」と「多数の児童」の授業（問答法）が再現されている。「吉野朝廷の時代に」「東北地方にも天子様のために尽くした人」があり「遠野の鍋倉神社」祭られている「5柱の神々も忠義をつくした人々の中に」はいるという紹介がなされ、北畠顕家に従う奥州勢のなかに、「南部師行公の岩手糠部、閉伊の精兵」もいたとする。当時、「師行公の城は糠部八戸」（根城）にあり、そこを出発する際の子や孫に遺された言葉が記される。「この度の上洛は、決死の覚悟である」、「討死したと聞いたなら、武士の本領を守ったと悦んでくれ」「一人でも生き残る者のあるうちは、君のため国のために尽くしてくれ」となる。そして、「忠義の武名は末代朽ちることがない」「お前達もよくわしの志を守って君のために尽くして呉れ、命を君に奉る！これが武士のほんとうの精神だ！」となるのである。それを聞いた児童は、「遠野南部氏の忠誠」、「自分の利慾のためでなく、君のため国のために尽くしたところ」に感銘をうけるのである。執筆者は不明だが、ここで、初めて、岩手県の教科書に「南部勤王5世」が登場したのであり、教育の場で求められているものがよくわかる。武士に仮託されて忠義が示され、君国に尽くすとして、尊王愛国が明示される。

次に、『岩手青年教科書　昭和11年版』（1936年）では「5　南部師行の戦死」が掲載されているが、これを執筆したのは、鈴木重男であった。ここでは、南部師行が和泉の石津で戦い破れた状況を臨場感豊かに描かれている。鈴木吉十郎・重男資料に「南部師行の戦死」（資料番号：1075～78）の自筆原稿が4種あり、幾度も修正しながら原稿をつくっていったことがわかる。さらに、この時期、鈴木は、「南部勤王略記」（岩手県教育会『建武中興　郷土教材叢書　第2輯』1934年）を著しているが、この冊子は、建武中興六百年記念式の訓話、講演の参考資料として編輯したとされる。この建武中興六百年とは、建武改元六百年にあたるとして全国で建武中興六百年祭が挙行された[70]。

日本文化研究所は、日本精神涵養に資する児童読物を募集する。それをうけて、遠野小学校訓導の小原芳郎は、この建武中興六百年祭にあたって、校長沼里末吉に奨められ、鈴木重男の

協力を得て、「遠野南部氏の忠烈を物語り化」した「勤王五世物語」を、これに応募する。その結果、「小国民文庫」の一つとして採用され、『遠野南部家　勤王五世物語』（明治図書、1935年）として刊行される。1935（昭和10）年2月には、遠野小学校で頒布会が実施されるなど（『岩手日報』2／26）、遠野は、南部勤王五世の町としての地域意識を強めていった。

そして、1937（昭和12）年は、南部師行が戦死してから600年ということで『岩手県報』号外が出され、「岩手県学務部長」から「下閉伊支庁長、各市町村長、各学校長」宛に「南部師行公六百年記念祭ニ関スル件」が出される。建武中興の「大業」に触れ、「君臣ノ大義」が明らかになり、その「偉績ヲ追慕景仰スル」ことに意義があり、「国体明徴ノ有力ナル国民的行事」の必要性を述べる。特に、「東北ノ将士」、「南部師行、葛西清貞ノ率ヰシ将兵ハ皆本県ヨリ出テタル」ことを想起し「内外ノ時局重大ナルノ秋、県民トシテ回顧シ顕揚スル」ことが重要であるとして、戦死した5月22日に「南部師行公記念祭」の実施を求めた[71]。

遠野では、南部師行公記念大祭の2日目は、鍋倉社頭で記念式、神幸祭が挙行され、その後各町内から山車や余興が供奉し、十町に亘る行列が町内を練り歩いた。それは「尊氏の勧降状をはねつける所、後村上天皇より粟津口の太刀や甲冑を拝領する所及び師行公石津で戦死する図、南部家の紋向鶴などの山車物から大名行列、現代物では神風や南洋の土人等の余興もあり、近郷よりの神楽鹿踊等、次から次と続き昔懐かしい南部囃で、遠野城下を練り歩いた」というものであった。遠野挙げての大祭で、夜になっても「鍋倉神社には神楽と芸者手踊りあり、城山には間断なく花火が打ち揚げられ」「鍋倉城は全く不夜城」（『岩手日報』5／23朝刊）のようであった（同日、遠野忠魂碑祭も実施）。山車に描かれた「師行公の忠節図絵」は、「勤王五世物語」が、地域の物語として定着していることがよくわかる。遠野は、『遠野物語』ではなく、『勤王五世物語』の町であった。「教化ノ中心」としての小学校と、「文化ノ先導者」としての小学校の教師[72]が、大きな役割を果たすことによって、浸透していった教育文化がここにはあった。

「南部師行公記念祭」当日、31回岩手県教育会総会が開催される。その際に池田長五郎が「奥羽の勤王について」と題して講演をおこなう。それは、勤王五世の事蹟に触れながら、「東北振興」が叫ばれている状況で、「東北の将兵が示した忠烈の精神は決して新しいものではなく六百年の昔に遡る歴史的伝統的魂であるといふ事を自覚するならば」、「郷土に対する愛、東北振興に対する気力も」生じてくるという結語であった[73]。ここでは、「東北将兵」の「忠烈の精神」が郷土愛や東北振興に結びつけられているのであり、「東北振興ノ為ニ東北読本ヲ編纂」したという、文部省『東北読本』[74]の目的ともつながっている。この講演をうけて、遠野小学校校長三田憲が、「南部氏の忠烈」は、「岩手県人の名誉である」が、「地元の遠野は何をして居るのか。社殿の改築も結構。お祭り騒ぎも宜しからう」として、「此の忠烈の事実を国定教科書に掲載することの運動を起こさないのか」と断ずる。「南部師行」が教科書に現れただけでも、「国民思想養成上効果がある」と主張した。事実、この総会で、上閉伊郡部会から「南部氏ノ勤王事績ヲ国定教科書ニ掲載セラレンコトヲ其ノ筋ニ建議スルノ件」が提出され満場一致で可決された[75]。こうして、勤王五世物語は、教育の場で、特に、国民精神との関わりで、焦点化され、国定教科書に採録させようとする運動が提起されていく。年月日不詳であるが、岩手県教育会が「南部氏勤王事績を国定教科書を採録せられんことを其筋に建議するの件」が残されている[76]。そこでは、五世の事績が記され、その事績は「南部氏家伝の古文書」「拝戴の武具什器等によりて證せられ」「学界亦確認す」としたうえで、贈位や鍋倉神社の経緯を記し、「国定教科書に掲載する」のは、「史実の普遍化」と「東北人自らの自尊を深め」るためと主張される（そ

の後の経緯は今後の課題)。

三田憲校長の在職期間(1936 ～ 40)には、1938年、自主的な学校公開研究会が開催され、1940年には、全526頁に及ぶ『皇民錬成を目ざす　遠野教育の実態』(謄写版)が刊行され、充実した教育実践が展開されていく。土屋直人は、これらを検討し、「戦時翼賛体制下の色彩を帯びた皇国民錬成・皇国主義的な側面と、大正新教育の流れを汲む児童中心主義、生活主義の色彩を濃くする側面とが併存、混在している」として「奇妙な錯雑」を指摘している[77]。石橋勝治を中心として、「遠野教育」を論ずる場合には、後者の側面に光を宛てて、高く評価する傾向が強く、前者の側面に言及されることは少ない。しかし、本稿の視点からすれば、むしろ、書籍のタイトルにもなっているように、前者の側面にこそ、特に、勤王五世が教育の場で展開される具体的な事実に眼をむけるべきだろうと考える。その点において、「第五章　生活高揚の示標／第一節　訓練版／第二節　級訓／第三節　週訓／第四節　グラフ／第五節生活カレンダー」となり、「第六節　勤王デー」では、「毎月二十三日は勤王デー」で、「二十二日は南部勤王五世を祀れる郷社鍋倉神社の祭日」であった。そして、「親から子子から孫曽孫玄孫と相承け相継いで忠節をつくした五代に亘る勤王五世の精神こそ國体信仰のそれであり、協働自治以て皇運を扶翼し奉る実践こそ、我らの国家精神と日本人的努力の方向を指示するものである」(476頁)となる。そのために、神社の参拝や訓話、神社並墓前清掃参拝が実施され、「5、學級において／紙芝居にしたものの演出／児童會における談話　劇等／右の外に學級誕生會における紙芝居[78]、談話、劇化等」が行われた。そして、「尚學校図書館學級図書館には、當校小原訓導著「南部勤王五世物語」を備付けて廣く子供たちに読書させるやうにしてゐるが、それらは勤王デー特設の有無にもかかはらず、日常の子供の生活の中に取入れられてあるものである。」(477頁)としていた。「協働自治」は、「皇運を扶翼する」ためにあった。

また、1942(昭和17)年10月1日に遠野文化奉公会が遠野国民学校作法室において結成された。これは、遠野町の各文化運動団体を「一丸」とするもので、会長は三浦榮(校長)であった。その活動は、写真展、町内卓球大会、紙芝居挺身隊、郷土だよりの作成と郵送、そして、「勤皇五世顕彰運動」であった。この運動は、「関係各団体と協力、地方民が誇りとする南部勤皇五世の顕彰運動を積極的に行うふ」というものであった(『岩手日報』1942年10月2日、4日、1943年2月4日)。具体的な活動の実態については今後の課題ではある[79]が、遠野国民学校校長の三浦榮が会長を務めていることは興味深い(三浦は、戦後、1946年に結成された遠野文化協会の会長を務め、1947年公選初の遠野町長となった)。

一方、国定教科書に南部氏の事績を掲載させようとする運動は、八戸でも起こっていた[80]。八戸は、いうまでもなく、南部師行の拠点である根城があった(根城南部氏[81]は、その後、盛岡の南部年直の要請にしたがって、1627年に遠野に移封した)。それゆえに、八戸市会は、1941(昭和16)年、「南部師行以下五世ノ史實ヲ、國定教科書國史ニ編入スルノ件」を意見書として、文部大臣橋田邦彦に提出する。それは、市会議員の山口清陽(外29名)の意見書をうけてのものであった。それには、『東北読本』で「吉野時代の奥羽勤王事蹟」で言及されたことを一定評価しながらも、『東北読本』は「國語教授用」であり、「國語ノ傍ラに史的事項ヲ布衍スル」ようなもので、「國史教科書ニ編入」することを主張していた。同年12月に再度提出、同月八戸市教育会、1943年2月に青森県会の意見書が提出された。そして、山口は、「文部大臣、及圖書局長、圖書監収官、編修課長等に面接し、親しく意見を開陳」したのである[82]。

結果、「一方陸奥では、顕家が、義良親王を奉じて、弟顕信や結城宗廣・南部師行と共に、

力闘よく官軍の地盤を固めた。かくて顕家は、随處に賊軍を撃破しつゝ西上し、官軍の形勢は、頗る有望に見えたが、惜しくも、和泉石津の激戦で討死した。師行もまた、顕家に従って壮烈な戦死を遂げ、身を以つて、子孫に勤皇の道を教へた」と『高等科国史　上』（1945）に掲載されたのである。「編纂趣旨」では、「大いに注目を要するところ」として、「地方の勤皇の将星を追加しまして、七生殲敵の誓いを、今、さながらに體得せしめようとしたこと」[83]としている。

以上から、先の1943（昭和18）年5月に、「八戸市会議員　山口氏来校　勤王五世資料研究ノタメ」（『学校日誌』）と記されたのは、まさに、八戸市会議員山口清陽が、国定教科書に記載させるために、勤王五世の遠野における状況を調査するために来校したということがわかる。

こうしてみてくれば、日露戦争後に、帝国主義的な国家体制を支えるために、「愛国心」（「郷土愛」の延長としての）を備えた国民（「帝国臣民」）づくりのための国民教化が、贈位による顕彰や史蹟顕彰、神社の創設、国民道徳の発揚などによって進められていく[84]。その一方で、遠野地域では、「南朝勤王」という遠野南部家の固有な特性を、歴史のなかから見出し、郷土史研究としてかたちづくり、普遍的な「史実」として提示しながら、それに基づいた新たな「史蹟空間」を創りだし、国家に対して、自らの正当性（勤王としての士族から、勤王としての地域）を主張していく。郷土史の自立は、国家の歴史に接合され、その一部として位置づけられる（包摂される）ことによって、果たされていった。「南部勤王五世物語」は、『郷土読本』『岩手青年教科書　昭和11年』、『東北読本』、そして、国定教科書『高等科国史　上』へと、段階を踏んで記載されることによって、地域の自己主張は、国家的な認証を受けたのである。

そうした教育文化の思潮が地域を覆っていくとき、最も大きな役割を果たしたのは、小学校と教員であった。一般には、近代の小学校は、地域の協力によって建設され、小学校の行事には地域の人びとが参加し、地域の催し物や集会も小学校で開かれ、「かつて小学校は、地域のセンターであった」と位置づけられる[85]。例えてみれば、現在の「公民館や保健所・体育施設・図書館など」の役割を果たしたのであり、学校に勤務する教員は、「地域の文化人」として、地域住民から敬意を払われていた[86]。

しかし、遠野では、より積極的な意味をもっていた。教員は、旧士族層としての「文化エリート」であり、国民教化の精神文化（国民道徳）の先導者[87]であった。教員は、遠野の近代の長いスパンのなかで、勤王五世顕彰運動（士族籍回復運動、国定教科書への編入運動など）の中枢にあって、地域の教育文化を主導してきたのである。

(1) 別稿で、学校資料に関する研究史や具体的な活用の方法などを記した。参照していただきたい（拙稿「歴史に学ぶということ－『私たち』と資料－」『歴史評論』第877号、2023年5月、「歴史的思考の始まる＜場＞－学校資料・地域資料を活用するために－」會田康範・駒田和幸・島村圭一編『「歴史的思考」をささえる営みをつなぐ（仮）』戎光祥出版、近刊）。

(2) 大平聡「学校日誌に記されたスペイン風邪」（『宮城歴史科学研究』第89・90号、2023年3月）。他にも、嶋田典人「公文書管理条例・公文書館と学校日誌－大正七年スペイン風邪と昭和二十年終戦前後の記録を通じて」（『香川県立文書館紀要』第25号、2022年3月）などがある。嶋田は、ここで、公文書としての「学校日誌」の資料的価値を提示しながら、公文書館の設置によって、「散逸防止」と「利用促進」を提唱していることは重要であろう。

(3) 戦時中の学校と教育活動に焦点をあわせて、勤労奉仕や兵士の見送り・遺骨の出迎えなどの状況が、『学

校日誌』などの学校資料を活用して授業が組まれてきた（入倉光春「国民学校日誌を読んで戦争を考える授業」『歴史地理教育』第819号、2014年、齋藤賢一「地域に学ぶ－角田市立枝野小学校の『学校日誌の活用・教材化』を通じて－」『宮城歴史科学研究』第82号、2019年など）。

(4) 伊能嘉矩「遠野に於ける維新以前の教育及び学芸」（『遠野史叢』第3篇、1923年、29頁）。伊能嘉矩は、遠野出身の人類学者で、日本における「台湾研究の起点」と位置づけられ、その研究は、人類学、歴史、地理、民俗学など、広範囲にわたるものであった（春山明哲「日本における台湾史研究の100年－伊能嘉矩から日本台湾学会まで－」（『アジア経済』第60巻第4号、2019年）。伊能の伝記的な側面は、荻野馨編著『伊能嘉矩　年譜　資料　書誌』（遠野物語研究所、1998年）が詳しい。信成堂についての記述が、1923年当時の伊能の認識であることは留意してよい。

(5) 「閉伊郡横田村字新町第1番小学開校伺」（『岩手県教育史資料』第2集、1957年、118頁）、『開校満五十年記念　遠野小学校誌』（1923年）、『遠野小学校　教育八十年』（1953年）などをまとめた。なお、1876（明治9）年の公立小学校一覧によれば、横田小学校は、教員7、男子166、女子59、東横田小は、教員3、男子46、女子28という状況であった（『日本帝国文部省年報　第4　第2冊』文部省、1013頁）。

(6) 「加納久宣　閉伊・九戸両郡巡視日誌」（『岩手県教育史資料』第6集、1958年、156頁）。なお、当時、地域の小学校の学務の監督をおこなったのは、学区取締であり、「地方名望アル者」から任命され、区、戸長の兼任も認められた。米内直豊は、1879（明治12）年には、西閉伊郡郡長代理郡書記（小笠原美治『官令全報』第32号、10頁）、翌年には西閉伊郡長として名前がみえる（『岩手県教育史資料』第8集、1958年、96頁）。しかし、他書では、1879年の西閉伊郡長は、米内眞豊であり、直豊は誤りであろう（『上閉伊郡誌』1913年、前掲『開校満五十年記念　遠野小学校誌』1923年、『遠野町史』1968年）。興味深いのは、伊能友寿で、1875（明治8）年には第12大区三番扱所（後の上郷村）の戸長であり、1878（明治11）年には戸長を辞職し、教導職につき、後には鍋倉神社の宮司となる。そして、伊能嘉矩は、この祖父友寿から国学を学ぶのである（上郷村教育会編『上郷村誌』1935年、21頁、板澤武雄『伊能友壽翁年譜　伊能嘉矩先生小傳』大洋社、1939年）。

(7) 岩手県教育会上閉伊郡部会『上閉伊郡教育五十年史要』（1923年）42頁。

(8) 江田泉は、最初の横田小学校の教員であったが、1874（明治7）年には辞職していた。学務委員は、「教育令」に伴って設置が義務づけられ、「町村内ノ学校事務」を管轄していた。

(9) 『日進新聞』第609号、1880年11月13日。

(10) 前掲、註(5)、『開校満五十年記念　遠野小学校誌』、76頁。

(11) 軽部勝一郎「自由民権期における近代学校成立過程の研究－岩手県遠野地方を事例として－」（『日本の教育史学』第47号、2004年6月）。

(12) 前掲、註(5)、『開校満五十年記念　遠野小学校誌』、78頁、ここで、堀内が「帳簿を整頓し教授を改良せられたり、其余暇に於てや時々演説会を開きて大に教育の思想を養はれたり」とある。

(13) 「11・12　辞職・西閉伊郡横田・白岩・光興寺村学務委員・江田泉」／「12・28　西閉伊郡横田・白岩・光興寺村学務委員申付け、奥寺勇太・菊池源助・伊能友寿・沢村庄治・外川貞治・高室勘兵衛・山奈宗真・村井又平・宇夫方文吾・新田劔」とある（『岩手県教育史資料』第8集、1959年、38-39頁）。

(14) 『遠野市史』第3巻、1976年、532 ～ 533頁。1881年7月、交詢社の入社申込35名のうちの一人として、「陸中国西閉伊郡遠野駅開進社　農　山奈宗真」の名前がみえる（「常議員会記事」『交詢雑誌』第53号、1881年7月）。

(15) 堀内政固は、『日進新聞』、『盛岡新誌』で教育論を多数執筆している。なかでも、「我県教則改正ノ布達ヲ読ンデ疑惑ヲ生ゼリ」（『盛岡新誌』第28号、1880）では、県の方針が、教育令の精神に背くものとして厳

しく批判していた。山奈と同じく、堀内も交詢社社員として名前がみえる（「陸中国西閉伊郡遠野駅横田学校教員　堀内政固」『交詢雑誌』第42号、1881年3月）。政固は、花巻の給人堀内三九郎（政弼（まさすけ））の三男で、父三九郎は、「盛岡藩における活版印刷の元祖」とされ、印刷業は、次男政業が継承した（小原茂「堀内家の人々－三九郎とその子たち－」『花巻史談』第18号、1993年）。1875（明治8）年に、活版印刷九皐堂（きゅうこうどう）は、花巻から盛岡へ移転開業し、明治・大正期の岩手県の印刷業界の中心であった（長江好道ほか『岩手県の百年』1995年、40頁）。この九皐堂は、開進社とともに、『東北教育新聞』の売捌所でもあり、後に、伊能嘉矩が健筆を振るう『岩手学事彙報』の出版元となっていく。

(16)『東北教育新聞』第3，4号、1880年6月。なお、こうした動向と教育思想については、土方苑子「岩手県における自由民権運動と教育－求我社の運動における教育の位置と教育要求」（『国民教育』第16号、1973年4月）が重要である。また、『盛岡新誌』から『東北教育新聞』への動きについては、大島晃一「『盛岡新誌』発行事情考」（『岩手県立博物館研究報告』第5号、1987年7月）を参照のこと。

(17)『日進新聞』第658号（1881年1月19日）。

(18) 田面木貞夫『遠野の生んだ先覚者　山奈宗真』（遠野市教育文化振興財団、1986年）49頁。

(19) 呉密察「従人類学者到歴史学者　台湾史研究的巨峰伊能嘉矩」（『當代』135号、1998年11月、但し、田中梓都美「伊能嘉矩の台湾認識と原住民の『首狩り』習俗に関する言説」『史泉』第111号、2010年からの引用）。

(20) 堀内は、1880年から1882年まで、横田小の首座訓導を務める（前掲『開校満五十年記念　遠野小学校誌』1923年）が、その後は、遠野を離れて、教育界でその足どりをたどることができる。1882から3年にかけては、「海内漫遊紀程」と題して『交詢雑誌』に連載をもち（第92号～131号）、1885年には、岩手県学務課員として名前がみえる（『巌手新聞』第288号、5月10日）。学務課、中学校、師範学校の教職員によって結成された、巌手教育協会で「小学教授法」を講じている（『巌手広報』1884年12月24日）。さらに、『職員録』『官報』をみると、山形県属、東京都内務部、愛知県属などで名前がみえ、愛知県では小学校教員検定常任委員など（『職員録 明治３４年（乙）』1901年）を勤めた。こうした経歴からか、堀内政固編で『尋常師範学校・尋常中学校・高等女学校教員検定試験問題集』（金昌堂、1896年）を出版し、『新按日本地図』『新按世界地図』（金昌堂、金港堂、1895年）なども「地図専門学士」として刊行している。そして、1903（明治36）年には、前年からの教科書疑獄事件の被告として逮捕されるのである。その際の予審決定書によれば、1901年に愛知視学に転任し、金港堂からの依頼をうけて、教科書採用の報酬を得たことがわかる（『巌手日報』第1817号、5月26日）。

(21)「士族復籍請願書」（鈴木吉十郎編纂『遠野士族名簿』1900年）。

(22)『遠野町誌』（第３、４巻）『遠野の歴史』などを簡略にまとめた。こうした自治体史のなかで描かれる歴史認識を示した。

(23) 前掲、註(5)、『開校満五十年記念遠野小学校誌』73頁。

(24) 江田明彦「江田霞邨とその師友」（『東洋文化』復刊第73号、通刊307号、1994年9月）107頁。

(25)「山奈宗真」（浦田敬三・藤井茂『岩手人名辞典』2009年）。詳しくは、註(18)参照。

(26) 鈴木吉十郎編『山奈宗真略伝』（上閉伊農会、1911年）11頁。

(27)「鍋倉神社願」（『山奈宗真資料』408、遠野市立図書館蔵）。

(28) 前掲、註(5)、『開校満五十年記念遠野小学校誌』75頁

(29) 伊藤榮一『波木井南部家　勤王八世傳』（波木井南部八世勤王家後援会、1922）。波木井南部八世勤王家後援会の場所が遠野町になっているところから、こうした団体が存在したと推測されるが、実態は不明である。伊藤は、のちの遠野郷土研究会の会員である。

(30) 斉藤順治著・田口小作校訂『南部五世傳』（1878年）。

(31)「健社趣意書」(『山奈宗真資料』408、遠野市立図書館蔵)。

(32)『岩手県教育史資料集』第3集、1957年) 28頁、『開校満五十年記念　遠野小学校誌』、『上閉伊郡教育五十年史要』(1923年) などを参照のこと。教導職 (僧侶や神職) と教員の兼務は禁止されていたが、岩手県では特例で許可されていた (「学校教師之儀」『岩手県教育史資料集』第2集、1957年) 121頁。

(33)『岩手県教育史資料集』第3集、1957年) 34頁。1875 (明治8) 年2月12日に、盛岡の旧仁王小学校 (藩校作人館) 内に「小学教授伝習」が許可されたが、横田小学校において伝習所が許可されたのはそれから遅れること、わずか一週間後であった。

(34) 園田英弘・濱名篤・廣田照幸『士族の歴史社会学的研究－武士の近代－』(名古屋大学出版会、1995年) で示された世界が、より純粋な展開を示したようにみえる。

(35)「公立西南伊郡内中学校建立建議」(『山奈宗真資料』480、遠野市立図書館蔵)

(36) 民権運動も明治政府も、国家を主体的に担う意欲をもった「国民」をつくっていったとするなら、遠野南部家の旧臣たちは、より苛烈に、「国民」として「尊王」を希求していくのである。

(37) 田尻佐編『贈位諸賢伝 二』(国友社、1927年)、237-238頁。贈位対象者の小伝であるが、南部師行について「遠野南部政行の三男」とある。以下、1908年、政長に正五位、1915年、信政に従四位、1918年、信光に従三位が贈られ、それぞれの小伝が記される。

(38) 前掲、註 (21) 参照。

(39)「鍋倉神社」(『遠野郷土歴史』不明)。遠野尋常高等小学校の用箋に手書き (縦書き) で書かれているが、著者、成立年代ともに不明。ただし、この「鍋倉神社」の項は、岩手県教育会下閉伊郡部会編『上閉伊郡志』(1922年) に、全く同じ文章が掲載されている。おそらくは、『遠野郷土歴史』が先に成立し、それを『上閉伊郡志』に転載したものと思われる。『遠野郷土歴史』は便宜的に、後年、名づけられたもので、正確には『郷土誌』であろう。先の忠魂碑の記述からいえば、1910年以降1922年までの間に成立したと考えられる。

(40) 忠魂碑が日露戦争後に登場し、その後、参拝・礼拝の対象として国民教化の機能を持っていたことなど、籠谷二郎『近代日本における教育と国家の思想』(阿吽社、1994年、第10章) を参照のこと。

(41) 藩祖の祭祀や史蹟顕彰によって、「地域の歴史を国家の歴史に位置づける」ことが実践され、日清・日露戦争などを契機にして、その認識は地域社会へ拡大していった (高木博志「『郷土愛』と『愛国心』をつなぐもの－近代における『旧藩』の顕彰」(『歴史評論』第659号、2005年)。羽賀祥二『史蹟論－19世紀日本の地域社会と歴史意識』(名古屋大学出版会、1998年) も参照のこと。

(42) 田中梓都美「伊能嘉矩の台湾認識と原住民の『首狩り』習俗に関する言説」(『史泉』第111号、2010年)。

(43)「鹿之狸自叙伝」(荻野馨編著『伊能嘉矩　年譜　資料　書誌』遠野物語研究所、1998年)。

(44) 前掲、註 (11) 参照。

(45) 前掲、註 (4)、36頁。

(46)「私立書籍館設立願」(『岩手県教育史資料集』第8集、1958年、95 ～ 97頁) では、1880 (明治13) 年、横田小学校内に信成堂という名称で私立書籍館を設置されたことがわかる。その名称は「旧邑南部氏ノ遺意」を受けて信成堂としていた。また、「岩手県年報」(『日本帝国文部省年報　第九』明治14年、389頁) には、「書籍館ノ現状」として、山奈宗真の所蔵書籍と「旧江刺学校ノ所蔵ヲ借用」した書籍をあわせて和漢書籍315部をもとに設置されたことが記されている。観覧料を徴収せずに、利用者の便宜がはかられ、この年の利用者は506人であった。翌年の「岩手県年報」(『日本帝国文部省年報　第10』明治15年、464頁) では、廃止されたことが記され、その理由は、観覧料がなく歳費収入の道がなく、山奈が「牧場ヲ開キ、其地ニ寄留スル」ので館内の管理ができなくなったとされている。

(47)「西閉伊郡横田村養成社之儀ニ付、西閉伊郡役所へ照会」(『岩手県教育史資料集』第10集、1961年) 92 ～

94頁。

(48) 民権運動における教育要求の問題は、盛岡の民権結社求我社とも関連している。求我社は、「教育要求を多く掲げ、社員に教師を多く含み、私学を併設して教育活動を行なうなど教育と深い関わりをもった点で、全国の民権運動の中でも特異な存在」（前掲、註16：土方論考）と位置づけられる。この求我社が設置した私学には、行余学舎があり、教員として田口小作の名前がみえることも興味深い。「行余学舎規則」によれば、「小学ノ教」を受けずに、昼間学ぶ暇がない者を対象にした夜学であり、尋常小学を卒業してなお学びたい場合や「師範生徒」に志願して「予メ其学力ヲ」養おうとする場合も入学が可能であった（「私学開業願」『岩手県教育史資料　第6集　学制篇Ⅴ　明治11年』1958年、124 ～ 125頁）。その意味では、求我社と行余学舎の関係と、信成社と養成社の関係は相似形をなしていた。

(49)「年譜」（荻野馨編著『伊能嘉矩　年譜　資料　書誌』遠野物語研究所、1998年）12頁。前掲『開校満五十年記念　遠野小学校誌』（1923年）46 ～ 47頁。

(50) 遠野一寒生　梅陰子　稿「学校近傍地形教授法」（『岩手学事彙報』第33、34号、九皐堂、1885年）。梅陰子は、伊能嘉矩の筆名。

(51) 佐々木喜善宛柳田国男書簡（1910年6月18日）（遠野市立博物館）。

(52) 遠野市立博物館『日本のグリム佐々木喜善』（2004年）30頁。初版は、350部の自費出版であり、佐々木が第1号であった。

(53) 遠野市立博物館『遠野物語の100年』（2010年）。

(54) 岩崎敏夫『柳田国男と遠野物語』（遠野市立博物館、1985年）10 ～ 12頁。この書簡については、高柳俊郎『柳田国男の遠野紀行』（三弥井書店、2003年）42頁に掲載されている。

(55) 板澤武雄『伊能友壽翁年譜 伊能嘉矩先生小伝』（大洋社、1939年）41頁。但し、ここでは鈴木重男を及川忠平の子としているが、それは誤りで、鈴木吉十郎の長男が鈴木重男であり、板澤も後に訂正している（「あとがき」伊能嘉矩『遠野叢書第1集　遠野夜話』遠野叢書刊行会、1959年、134頁）。

(56) 前掲、註(54)。

(57) 郷土資料館は、その後、1927（昭和2）年の遠野の大火によって、延焼し、展示資料は焼失してしまう。現在、鈴木重男「陸中遠野郷館郷土資料書目（『書誌』第3冊、文苑閣仮事務所、1926年）によって、当時の資料書目を知ることができる。

(58) 郷土研究会・会報『遠野』（第1号、1924年）。

(59)『遠野物語』（初版本）のなかにも、92の「土淵村の里の子」が「早池峰に遊び」に行った際のことが記されているが、この話を提供したのは、「土淵小学校長であった鈴木重男」であり、「鈴木から伊能に」「伊能から柳田」が聞き取ったものと推測されている（後藤総一郎監修『注釈　遠野物語』筑摩書房、1997、277頁）。鈴木は、土俗の側面をも「郷土誌」として把握していた。

(60) 鈴木重男「史跡言上」（「鈴木吉十郎・重男資料」905、遠野市立図書館、以下、鈴木資料）。1933（昭和8）年11月28日に「三陸震災地」を視察するために、東久邇宮が遠野町に立ち寄った。その際に、鈴木重男が「鍋倉神社祭神事歴」について説明した（『岩手日報』11月29日夕刊）。そのときのことを「史跡言上」として振り返ったもの。資料中の板澤氏は、板澤武雄のこと。昭和6年に脱稿した「大綱」が何を指すのか、不明であるが、刊行年代との関連からすれば、おそらくは、『鍋倉神社祭神事歴』（1933年）と推測される。

(61)「17　[大正十年] 八月二十八日　封書」（『佐々木喜善全集（Ⅳ）』（遠野市立博物館、2003年）12頁。

(62)「22　[大正十一年] 三月三十一日　封書」（『佐々木喜善全集（Ⅳ）』（遠野市立博物館、2003年）15頁。

(63) 柳田は、夥しい郷土誌が刊行されるなかで、その分類を試みる。「理想の卑いもの」から列挙し、まず、「土地繁昌が当の目的」で「客商売」のもの、次に「愛郷の精神を養うはすなわち愛国心を盛んにならしむるゆ

えん」などとし、「愛郷心などという見事な語は、いかようにもその意味が取られる」として批判し、単に「お国自慢の種」を供するだけになりがちとしている。そして、「箇々の郷土がいかにして今日あるを致したか、またいかなる拘束と進路とを持ちいかなる条件の上に存立していたか」を明らかにすることの重要性を述べている（柳田国男「郷土誌編纂者の用意」1914年『柳田国男全集27』ちくま文庫、1990年、10－15頁）。現在でも傾聴すべき視点であろう。

(64) 外池智『昭和初期における郷土教育の施策と実践に関する研究－『総合郷土研究』編纂の師範学校を事例として』（NSK出版、2004年）。ここで注目したいのは、「文部省の推進によって全国一斉に開始された郷土教育運動は、大正期から唱えられてきた作業主義、生活主義の合科教授、あるいは自発主義の体験学習などの思潮を、一挙に『郷土教育』という看板に塗りかえさせてしまうことになった」（岩手県教育委員会『岩手近代教育史』第2巻、1981年、564頁）という指摘であろう。

(65) 篠原英太郎「郷土教育の重要性」（『郷土』第1号、刀江書院、1930年）。『郷土』は民間団体、郷土教育連盟の雑誌であり、文部省と民間団体との関係も含めて、前掲、註(64)の外池の著書を参照のこと

(66) 伊藤純郎『増補　郷土教育運動の研究』（思文閣出版、2008年）9頁。

(67) 岩手県師範学校主催の『郷土教育展覧会』の陳列品目録(855)は、鈴木資料に残されている。

(68) 同じく、鈴木資料に「郷土教育講習会講師ノ日程」（1499）、「郷土教育講習会要項」（1455）、そして、同時に開催された「郷土教育講習会附属展覧会目録」（1451）がある。なお、この文部省主催の郷土教育講習会は、1933年にも、札幌・山形・長野・岡山・福岡で開催され、その記録も刊行されている（『農村の研究方法：文部省主催郷土教育講習会記録』刀江書院、1935年）。

(69)『岩手青年教科書』の奥付には、岩手県教育会の代表として名前が記されている。

(70) 東北でも、北畠顕家の拠点として霊山が史蹟及び名勝の指定をうけるなど、南朝顕彰がおこなわれる。霊山では、記念祭祭典、史料展覧会などが行われ、南朝史蹟の指定としても、霊山をめぐる動きは、興味深い（伊藤真由美「近代東北地方における南朝史蹟の顕彰－多賀城址と霊山を事例として－」『宮城歴史科学研究』第53号、2003年）。

(71)『岩手県報　号外』「12社兵第3703号」（昭和12年5月12日）

(72) 笠間賢二『地方改良運動期における小学校と地域社会－「“教化”ノ中心」としての小学校－』（日本図書センター、2003年）。

(73) 池田長五郎「奥羽の勤王について」（『岩手教育』昭和12年7月号）。

(74)『東北読本』の立案・編纂過程は、伊藤大介「東北振興調査會会と東北読本」（『国史談話会雑誌』第56号、2015年）を参照のこと。『東北読本』（上巻、1938）には、「第十　吉野時代の奥羽勤王事蹟」があり、東北全体の政治情勢が記されていて、教授上の注意として、「四、勤王将士の忠誠が、東北振興に邁進する精神と相通ずる所以を会得しせめること」とされている。また、南部師行戦死の場面は、先の『郷土読本』と同様に、「もし一人でも生残る者のある中は、大君の御楯となれ」という師行の言葉から「誠忠のほどを察すべき」とされる。「一、勤皇の将士を追慕するとともに、各自それぞれの分に応じて皇運扶翼に邁進せんとする決意を堅からしめるやう指導すること」「二、徒に史実の穿鑿せんさくに堕することなく、勤皇将士の赤誠に感奮かんぷんせしめるよう指導すること」とあることが注目される。

(75) 前掲、註(73)、三田憲のコメント、協議題ともに、掲載されている。

(76) 鈴木資料(1106)。

(77) 土屋直人「昭和戦前期『遠野教育』の実践理念について－遠野尋常高等小學校編『皇民錬成を目ざす遠野教育の實態』（『岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』第2号、2003年）。「遠野教育」についての研究史も、この論考でまとめられている。

(78) 紙芝居そのものは現存していないが、その脚本が遠野国民学校菊池精一によって「遠野南部物語」として掲載された（『岩手日報』1943年4月2日、8日：朝刊）。最後は、「かくして遠野南部は、この後所謂勤王五世と呼ばれる、忠節の若武者達によって、いよいよその光を輝かすのであります。実長・実継は我につづけと今なお，声高に叫んでゐる。大東亜戦争下に生をうけるみたみわれら、今こそ、皇国未曾有の大理想実現に向かって、この二祖先の精神を、最高度に生かして行かねばならない」と結ばれる。

(79) 顕彰運動との直接的な関わりは不明であるが、例えば、1868年創業の「まつだ松林堂」は、「勤王羊羹」「勤王五世飴」「忠魂落雁」がつくられていた（小泉敦：聞き取り）。まつだ松林堂は、現在でも「明けがらす」の菓子でよく知られているが、この「明けがらす」の命名・意匠は、伊能嘉矩によるものであった。このカラスは、三本足の八咫烏であり、神武天皇東征の際に皇軍を導いた鳥であった。

(80) この運動については、工藤竹久「南朝の史跡根城と保存会の歩み」（『根城通信』第31･32合併号、2012年）、「第5章　八戸の中世史研究の歩み」（『新編八戸市史　通史編1　原始・古代・中世』2015年）を参考にまとめた。

(81) 菅野文夫「第4章　中世　第3節　南北朝の動乱と南部氏」（『新編八戸市史　通史編1　原始・古代・中世』（2015年）。

(82) 山口清陽編輯『八戸と根城』（1950年）20 ～ 22頁。

(83) 中村一良「『高等科国史上』の編纂趣旨」（『復刻版　国定教科書編纂趣意書』第11巻、国書刊行会、2008年）49頁。

(84) 住友陽文「史蹟顕彰運動に関する一考察」（『日本史研究』第351号、1991年）。

(85) 田村達也「小学校資料論―かつて小学校は地域のセンターであったという視点から－」『鳥取県立公文書館研究紀要』（第1号、2005年）。

(86) 大平聡「学校資料の利活用とその保存－地域史資料としての学校日誌－」（地方史研究協議会編『学校資料の未来－地域資料としての保存と活用』（岩田書院、2019年、155頁）。

(87) 本稿に登場した人物のほとんどが小学校教員であった。書籍や新聞などの出版文化だけでなく、鈴木重男は、1938（昭和13）年12月27日に、学校放送「教師ノ時間」（仙台中央放送局）で「奥羽地方勤皇事蹟」に関して講演をおこない（鈴木資料246「放送関係」）、さまざまなかたちで文化情報を発信していた。鈴木は、1939（昭和14）年5月3日、病死する。それをうけて『岩手日報』が「鈴木重男氏追悼号」（5／16夕刊）、『岩手教育』も、一冊すべてを追悼号としている（7月号）。その影響の大きさを伺うことができる。

なお、本稿は、「遠野教育とは何か」（遠野市史編さん講座：2022年11月19日）、「遠野の教育と文化」（近現代部会報告会：2023年1月27日）と題した報告をもとにしています。近現代部会でのみなさん（脇野博、小泉敦、伊藤大介、伊藤寛崇、小向裕明、菅原伴耕、前川さおりの各氏）との議論では、多くの示唆を得ました。また、資料の提供に関しては、編さん室の前川さおり、佐々木結花の両氏にたいへんお世話になりました。末筆ながら記して謝意を表します。

また、本研究はJSPS科研費 23K02475の助成を受けたものです。